
呪われた学校

ガラクタ・エントツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われた学校

【Nコード】

N88120

【作者名】

ガラクタ・エントツ

【あらすじ】

澤田あやめが通うミッション系の女子校には、吸血鬼の伝説あった。ある日、聖堂の清掃に向かった澤田は、聖堂から飛び出してきた少女とぶつかる。その子は簡単に謝るだけで、その場から去っていった。数日後、噂で彼女が学校を長期に学校を休むことを知る。噂では、吸血鬼の伝説を調べていて、吸血鬼に襲われたとの話だ。気になった澤田は、吸血鬼の伝説を調べ始めるのだが・・・

プロローグ

今リストカットが、一部の人の間でブームらしい。いわゆる「ファッションリスカ」。

ある芸能人が「リスカ」を告白してから、次々と他の芸能人が、リストカットを告白するようになった。

それに触発されて、一部の中学生や高校生が、流行としてリストカットを始めたのだ。

他にも、仮面うつ病なんていうのもあるらしい。

悩んでいる自分、考えている自分をアピールしたいのだろうか？

たぶん、そんな簡単なものではないだろうが、

私には、さっぱり判らない。

もっとも、私としては、「ファッションリスカ」よりも、別の噂の方が気になる。

噂によると、帰宅時など街中で貧血で突然倒れ、保護される女子が増えていくらしい。

その子たちの腕には大抵リストカットの跡があるらしいのだけど、彼女たちは覚えてないという。

では誰が彼女たちの手首を切っているのか？

吸血鬼との噂だ。

その吸血鬼は、首筋から血を吸うのではなく、手首から吸うらしい。

リストカットをしている少女は、自分でリストカットしているのではなく、吸血鬼に血を吸われているとの話だ。

何とも、現代的な吸血鬼だ。

「今日がとても楽しいと明日もきつと楽しく そんな日々が続いてく そう想っていたあの頃・・・」

昔の歌だけど、良い歌だと思う。

好きな歌だ。

でも、どんだけ馬鹿なんだ。

そんな楽しい日々が続くはずが無い。

私は今、人生の絶頂期に居る。もうすぐ下り坂。

後、数年経てば、明るく楽しい人生は終わり。

そして、10年も経てば、私たちも、おばさんだ。

大人になれば別の楽しみが見つかりと大人は言う。

S X?

もう、やってるし。

結婚?

子育て?

そんなの楽しいの。

公園では楽しそうだけど、家には暗い顔している人を私は知っている。

仕事?

駅ですれ違うOLやサラリーマン、おっさんたちは、本当に生きているの。

皆死んだような目をしている。

あいつらは、生きた死体だ。

そんな人生嫌。嫌だ。嫌だ。嫌だ。

私は、彼に出会ったとき運命を感じた。

世の中には普通の人とは違う特別な存在が存在する。

ただ単に、普通の人間を基準として、頭が良いとか、お金があるか、そういうのではない。

明らかに、神の基準による特別な存在。

それが彼だ。

私は選ばれた人間ではない。特別な人間ではない。

選ばれた人間、特別な人間に憧れる普通の人間だ。

そんな私であっても、運命の転換期、運命を変える瞬間と言っ
は判る。

私は彼に声をかけた。その瞬間、私の運命は変わるだろう。

第1話 澤田 あやめ

私の名前は、澤田あやめ。

都心にあるミッシヨン系の名門女子校に通っている高校2年生。

なぜ、そんな学校に通っているかと言うと、単に母親がそこ出身で強く勧められたから。

そして、そこに通うだけの財力があつたから。

お嬢様という程ではないが、そこそこ裕福な家庭であり、学校は俗に言うお嬢様学校として社会的には認識されている。

学校は歴史がある名門だけあつて、庭も広く、校舎も歴史ある洋館風のものだ。

都の歴史的建造物に指定されている。

もともと、建物だけではなく、人の頭も古い。

校内の美しい聖堂で行われる教頭の長い朝礼。

鮮やかなステンドグラスを通して、聖堂内を照らす美しい七色の幻想的な朝の陽ざし。

七色の光の中で話すシスターでもある教頭の姿は美しいが、話は長くて退屈。

「現在、若い人の中で、リストカットなるものが流行っています。

非常に愚かな行為です。わが校の生徒の中にも、既に数名・・・」

長い話が続く。

リストカットに関して、注意するのは正しいと思うのだが、話が要領を得ない。

「島田のリストバンド。まさか、リストカット隠しているんじゃないよね」と隣の島田にちょっかいをかける。

「そんなわけないでしょ。リストウエイトよ。昔からしているじゃない。前見ていないと後で怒られるよ」

「いったい何人が、この話を聞いているのだろうか。暇で暇でしようがない。」

「体調不良により、学校で倒れる生徒、休む生徒が増えています。ダイエットや夜更かしなど生活の乱れが原因です」

倒れる生徒を減らしたいなら、長い朝礼を短くしてほしい。あんなの長い話のせいで、倒れ子が毎回、居るんだから。」

教頭は、生活の乱れが原因だと言っけど、別の噂がある。

吸血鬼が現れて、女の子を襲うという噂だ。

事実、貧血で倒れる少女や学校を休む少女が多い。

リストカットする子は、当然貧血だけだ。

また、休んでいるという話の子は行方不明と言っ説もある。

学校が嘘について、体調不良と言っているのだ。

この噂を荒唐無稽と言うのは、簡単だ。

しかし、この学校には、昔から吸血鬼の伝説がある。それが妙に噂に信憑性を与える。

歴史が古く、ミッション系、洋館の校舎、女子校など、非常に西洋的な雰囲気、ドラキュラが合うのだろう。

逆に、普通の学校でドラキュラ伝説を作ったとしても、雰囲気が合わず白けるだけだろう。

吸血鬼が日本に居るとしたら、この学校以上に相応しいところはないではないだろうか？

もちろん、それだけではない。

この学校は、ミッション系、つまり宗教系の学校であり、生徒も

先生も、平均的な日本人よりも信仰心が厚い人が多い。

神や天使の存在、キリストの奇跡を信じている人が多いのだ。

神が存在して、天使が存在し、キリストの奇跡があるとすれば、当然、悪魔も存在してもおかしくない。

とうぜん、吸血鬼が存在していてもおかしくない。

物理的に証明しているわけではないのに、皮肉なことに、信心深い結果、吸血鬼の存在を信じてしまっている人も多い。

それが、独特な空気を作り出している。

もつとも、吸血鬼の伝説と言っても単純な話。

私は友人たちとの過去の会話を思い出した。

「この学校には、吸血鬼の伝説があるのよ」

噂好きな少女、小村かおりは、近頃知った面白い(?)話を澤田に話そうと待ち構えていた。

「ミッシヨン系で、学校内に教会があるのに、何でそんな邪悪なものがあるの」

仏教でもそうだが、教義では、お寺、教会、墓地は聖なる場所であり、悪霊とかがもつとも苦手な場所であるはずだ。

しかし、頭では判っているが、夜の教会、寺は怖いし、墓地は幽霊が出そうで怖い。

それは死と関連して居る場所だからだろう。

そして、夜の学校も怖い。生徒たちで賑やかな日中とは違って変わって夜の無人の学校はかなり怖い。

その二つが合体した、この学校の夜が怖くないはずがない。

「吸血鬼の伝説は、外国から来た魅力的な神父が来ることから始まるの」

この神父、実は悪魔に魂を売っていて、夜になると、学校内で生徒を生贄にした黒ミサをやっていたらしい。

「でも、結局は学校にばれて、退治されて、この学校のどこかに封印されているらしいけど・・・」

「学校に封印されているの？この学校に吸血鬼がいるってこと」

澤田は俄然興味が出てきた。

「そういうこと」

「今度探してみようか」

「辞めましょうよ。怖いですし・・・」と早乙女愛。

「早乙女は怖がりだな。もっとも、封印されている場所は誰にも判らないらしいけど」

恐らく、過去にも何人もの生徒が、この噂を確かめようとしたんだろうな。

「そういう噂って、元になる事件があるじゃない。火のないところに煙は立たないっていうやつ」

「なんというか・・・学校の知られたくない暗部、黒歴史ってやつね。だいたい予想がつくな」

島田まなは、自分の考えた予想を言った。

「色男の若い神父が来て、女の子の魅力に負けて、女の子に手を出しまくったわけだ。学校は父兄にばれて、大問題になる前に、突然帰国を命じたわけだけど。要するに、外国人が女子生徒を魅了するが、吸血鬼が悪の道に誘うになったんだろうな。悪魔の儀式や生贄は・・・あの儀式が変化したものだな」

まあ、聖職者が性欲者になってしまっパターンだな。この学校に若い男性の教師が居ないのは、そのためだろう。

「そうですね。あれも立派な儀式ですものね」と早乙女愛。

「神と結婚して、H出来ないシスターから見れば、悪の道への誘い

か．．．楽しいのに」

すでに済ませてしまった、小森かおりの余裕の発言だな。

こうして、この学校の吸血伝説も、他の学校の伝説と同様、先輩から後輩へ、憶測混じりで伝わっていくのだろう。

第2話 掃除当番

今週は聖堂の掃除当番だ。

この学校は、広く緑も多く良い環境の学校。

設立された100年前は、ただの農村だったんだろっけど、今都内でこれだけの土地を持つのは不可能だろう。

この点は、さすが伝統校だ。

その点は良いのだが、結果、難点も多い。

まず、冬が寒い。

そして、なにより日々の清掃が大変なのだ。

広いうえに、緑は大量の落ち葉になる。

しかも、聖堂などは、美術品のように細工をしているものが多く、雑にはできない。

時間と手間がかかる。

放課後、掃除のために、小村かおり、早乙女愛と一緒に、両手に清掃道具をいっぱい持ち、聖堂に向かっていった。

聖堂に汚いものは置けないということで、わざわざ別の建物から持って来ないといけないのだ。

そして、清掃道具にも善し悪しがあり、当然良い道具程、掃除も早く終わる。

そのため、私たちは、いつも一番早く行き、一番最初に終わらせることにしていた。

突然、少女が聖堂から飛び出してきた。

ほとんど、前方を見ておらず、背後ばかり気にしており、私と小村かおりにぶつかった。

掃除道具は飛び散り、少女は手にしていた本を落とし、床に尻もちをつく。

どこかで見たとがある子だな。

そうだ、たぶん放送部の子だ。

朝礼とかで、マイクの準備をしていたりするから覚えているのだろつ。

「すみません」

謝罪も中途半端のまま、少女は急いで本を拾う。

そして、やはり背後ばかり気にしている。

(何をそんなに焦っているのだろうか?)

落ちた本を見ると、「吸血鬼ドラキュラ」「吸血鬼の辞典」「吸血鬼伝説の系譜」「黒魔術大辞典」「スラブの伝承」など全て魔術や吸血鬼関連の本。

吸血鬼にでも、追われているのか?などと考えてしまう。

少女は、急いで本を拾うと、また駆けて行った。

「何をあんなに焦っているんでしょうね」と早乙女愛。

「知らないわよ。あたしたちの手伝いをしないなんて、失礼な奴だな。」

小村が床に散らばった石鹸やバケツなどの清掃道具を拾いながら、文句を言う。

聖堂の中を見ても、誰も居ないし、特におかしい点もなかった。

数日後、学校に来ると彼女の話題で持ちきりだった。

「あやめ、知っている？ 一年生の子が、吸血鬼に襲われたって、入院したって話」

「知ってる。昨日、夜メールで聞いた」

「なんだ、つまらない」

彼女が体調を壊し長期の休みを取ったとの話を聞いた。

体調を壊し長期の休み。本当だろうか。行方不明とのうわさがある。

失そうと吸血鬼は関係があるのだろうか。

彼女が、聖堂から慌てて飛び出してきたのと何か関係あるのだろうか？

西村京子が吸血鬼について調べているとしたら、それは放送部の部活の活動として調べている可能性が高い。

そして、調べた結果を発表するつもりだったのではないだろうか。

放課後、とりあえず、放送部に西村のことを聞き、その後、図書館で吸血鬼について調べてみることにした。

放課後、放送部へ行ってみた。

西村京子が吸血鬼について調べているとしたら、それは放送部の部活の活動として調べている可能性が高い。

そして、調べた結果を発表するつもりだったのではないだろうか。予想は半分当たっていた。

ただし、放送部として部全体で調べていたのではなく、西村が1

人で調べていたようだ。

そのため、西村がどこまで調べたのかは、判らないとのこと。

「吸血鬼ネタって、放送部で過去何回か、調べたことがあるんだけど、いつも中途半端に終わってしまうのよね」

放送部部長の与田直美が口惜しそうに言う。

確かに、判ればニュースのネタとしては面白いだろう。

「なぜなんですか」

「理由は沢山あるのよ。そもそも発端の話が古すぎて資料も少ないし。あと教師に目を付けられるのよね」

「学校からの圧力ですか？」

「そうね。まあ、過去の不祥事と関係しているみたいだから、探られたくないんですよ」

「その時の資料とか、見せてもらえますか」

「ないんじゃないから。この間、西村さんが全部家に持って帰ったんじゃないかな」

何か判ったら、放送部に教えると約束して放送部を後にした。

第3話 図書

放課後の図書室には、8人ほどの生徒が居た。

1人が図書委員で、残りは一般の生徒。合同で宿題をする勉強部屋として使っている生徒も何人かいる。

図書室は歴史があるだけあって、蔵書数も他の高校とは比較にならないほど多い。

ジャンルはさすがに漫画こそないが、多彩だ。

さらに100年以上前の本すらも置いてある。

さて、西村京子は、どんな本を読んでいたのか？

「吸血鬼ドラキュラ」は有名なので覚えているが、他のものは良く覚えていない。

「スラブ」とか「黒魔術」とか、そんな感じだったと思う。

図書委員がいなければ、黙って貸し出しリストを見ることが出来るのだが、今は無理だ。

図書室に居る図書委員に聞いてみることにした。

図書委員の女の子は、眼鏡に三つ編みと見るからに、まじめ図書委員という感じの倉田真須美まゆみさん3年生。

「すいません。西村京子さんが、借りていた本って、判りますか」

「図書館の規則で、他人がどんな本を借りていたかを教えることはできませんよ」

「そうですか。そうですよね。プライバシーですものね。ありがとうございます。」

「なぜ、そんなことを聞くんですか？」

「偶然、彼女と最後に会った時、彼女、吸血鬼関係の本を持っていたからです」

「だから、吸血鬼に襲われたと思ったの？」

「さすがにそこまでは・・・」

「吸血鬼に関して、調べるだけで襲われたら大変よ。近頃、噂のおかげで吸血鬼関係の本を見ている人多いんだから」

「そうなんですか」

確かに、これだけ噂になっているのだから調べている女生徒も多いだろう。

「吸血鬼に関する棚は、あそこの神話や伝承のところですよ。この学校は吸血鬼の伝説があるだけあって、興味を持つ生徒も多く。書籍も充実していますよ」

棚に来ると、確かに充実している。吸血鬼と言っただけでも10冊はあるだろうか。

借りられている本もあるから実際はもっとあるのだろう。

私が本を立ち読みしていると、図書委員の倉田先輩の方から声をかけてきた。

「吸血鬼って、他の怪物と違ってロマンがありますよね」

確かに、吸血鬼にはロマンを感じる。

吸血鬼は美女を好むと言うが、女性も美形の吸血鬼が好きだ。

古くは、漫画の「ポー族」「ときめきトゥナイト」など、吸血鬼を恋愛の対象としてみる傾向がある。

海外でも「トワイライト」という小説がある。

女性向けの吸血鬼は、美形でセクシーと映画でも漫画でも決まっている。

「ヴァンヘルシン」の吸血鬼は美形ではなくなりました。

「倉田先輩は、吸血鬼のこと好きなんですか？」

「好きよ。だって、美形で素敵じゃない。それに、お姫様選ばれれば、永遠の若さと美しさが手に入るのよ」

他の怪物みたいに単純に命を奪うのではなく、血を吸うというのがポイントだろう。

他の怪物と違い、末長いお付き合いが可能だ。

長い間生きているので、知性もあり、大人の魅力もあるし、金もある。美形なら言うことなし。

さらに、吸血鬼に選ばれ、眷属になれば、永遠の若さ、美しさが与えられる。

「その代わり人間じゃなくなっちゃうんですよ」

「いいじゃない。人間じゃなくても」

この場所では、読み切れないので、何冊か本を借りて家で読むことにした。

「吸血鬼がいるとして、どうするの？　あなたが、退治するわけ」

「．．．」

そこまで深く考えていなかった。

単純に、気になっただけ。

どうしよう。自分自身が吸血鬼を倒すのか。無理です。

誰かに助けを求めることになるだろうけど．．．妖怪ポストがあるわけもなく、一体、誰に助けを求めたら良いだろう。

「警察に話しても無駄。霊能力者に話しても無駄よ。誰も助けてはくれないわ」

「なんで、無駄だって判るんですか？　やってみないと判らないじゃないですか」

「無駄なのよ。実際やってみた子が居るんですから」

「誰ですか？」

「名前は言えないわ。警察は吸血鬼なんて話は、相手にしてくれないし。霊能力者は話を聞いてもらえはするけど、そもそも吸血鬼に会えない。会えなきゃ倒せないでしょ」

「その子は結局、どうなったんですか？」

「知らないわ。今頃、吸血鬼の手下にでもなっているかもしれないわね」

夏も近づき、日没も遅くなっているのだが、あたりは、もうすっかり暗くなってしまった。

早く帰らないと。

ロッカーを見ると、何やら手紙のようなものが挟まっている。

宛先を見ると、自分の名前が書いてある。

気になり、すぐさま封を破く。

『これ以上調べるな』

とだけ書いてある。

たった一日調べただけで、脅迫文だ。

部活動の休みの日に、遊びでやっていて調査だったけど、俄然、やる気が出てきた。

第4話 ノート

家に帰り、本を読んでいると、一冊の本から小さな紙が出てきた。そこには次のように書いてあった。

「永遠の若さと美しさが欲しければ、我に血をささげよ」

永遠の若さと美しさ。これは吸血鬼かその眷属になれば、手に入る事が出来る。

血をささげるとは、噂のことを考えると、リストカットをしるという事なのだろう。

つまり、仲間になりたければ、リストカットをしるということなのだろう。

「冗談じゃない。そんなことをしてたまりますか。」

近頃学校でリストカットが流行っている原因は、これなのだろうか？

単純に、吸血鬼に襲われているのではなく、永遠の若さと美しさを得るために、積極的に吸血鬼に血をささげているのだろうか。

夜、ベットに入りながら、今日一日のことを振り返った。

そして、ある疑問が生じた。

私は吸血鬼が事件を起こしていると信じているのだろうか？

信じていない。

だが・・・どこかで、何かが引つかかる。
周りの人の影響だろうか。

神が存在して、天使が存在し、キリストの奇跡があるとすれば、
当然、悪魔も存在してもおかしくない。

もしかりに、万が一、本当に吸血鬼が居るとしたら・・・私はど
うしたら良いのだろうか。

昼間の倉田さんの質問を思い出す。

「吸血鬼がいるとして、どうするの？　あなたが、退治するわけ」
やはり、誰かに頼むしかない。
とりあえず、ネットを検索してみた。

ネットで吸血などの都市伝説・噂を調べていると面白い噂を見つ
けた。

怪物を倒す人たちの噂。

これは、『死の鐘』の変形版だ。

『死の鐘』とは、その鐘の音を聞いてしまうと、異界に連れてい
かれて、怪物に殺されると言う話だ。

その後、回避方法が追加された。

ポケットの中にタロットカードがあつて、『カードの名前』を叫
ぶと、魔法が使えるようになるというものだ。

さらに、この部分だけが、取りだされた変化した。

カードの魔法を使い異形の怪物や魔道師を退治する闇の狩人の噂。

こんな人たちが実際するのだろうか。

判らない。

でも、万が一、吸血鬼が実在するとしたら、万が一にも、こんな
人たちが居てもおかしくない。

万が一のことが起きたら、この人たちに頼もう。

そう思うと気が楽になって、安心して寝ることが出来た。

次の日、澤田は、放送部員だと嘘を言って、西村の家からノートを入手を入手した。

ノートは複数あり、放送部が過去に何回か、調査したことが判るもつとも、古いノートは40年前のものだ。その中には、数多くのインタビューや憶測や推理が書かれていた。

過去の在校生、先生へのインタビューなどは、かなり力が入ったものとなっている。

親子三世代、四世代と通っている家族も多いため、身近な人からインタビューしただけでも、相当当時の状況が判ったのではないだろうか。

この学校の吸血鬼伝説の元になった事件、それは、今から50年程前の話。

イタリアから1人の神父が派遣されてきた。

名前は、マルコ・ジュリアーニ。26歳。

日本語が堪能なことから派遣された二枚目の青年だ。

当然、若く二枚目の神父の赴任に、女生徒たちは色めきだつた。

しかし、若くても神父だ。女生徒たちがどんなにアプローチをしても一線を越えることはなかった。

赴任して、3年目、そんな神父も、ある少女と恋に落ちた。

2人は、他の生徒や先生にばれないように、静かに愛をばくくんだ。

連絡は手紙。会うのは、日が暮れた夜になってから。

赴任して、4年目、事件が起きた。

密告により、2人の恋は学校に知られることとなった。

生徒は卒業前ということ退学を免れたが、マルコは除名されイタリアに帰国することとなった。

これだけでも、伝説の元には十分だろう。

しかし、話には続きがある。

帰国したはずのマルコが、実は帰国していなかったのだ。

これは先生方も知らない事実であり、一部の上層部のみが知っている事実だった。

当初、学校側も、マルコが帰国の準備をし、部屋を払っていたことから帰国したものと思っていた。

イタリア側からの連絡があり始めて判ったのだ。

イタリア側からの要請もあり、入国に問い合わせたところ、出国の記録はない。

女生徒への連絡もない。

マルコは自殺したかのではないか？

という噂が広まった。

キリスト教の世界では、一般的に自殺者は天国に行けないと言われている。

そのことがマルコが吸血鬼になったという話になり、マルコが行く不明という事実が、吸血鬼が学校に封印されているという話を生むことになったのではないかと書かれている。

そして、現在でも、マルコの話は判っていない。

第5話 開かずの間

放送部のノートを見ることにより、西村京子に多少は近づけたのではないだろうか。

西村京子と言えば、なぜ彼女は、私たちが清掃しに行った日、あんなに慌てて聖堂から飛び出してきたのか？

彼女が出た数秒後、聖堂に入ったが誰も居なかった。その数秒の間に外に出たのだろうか。

それとも、彼女は妙に後ろ気にしていたので、何かに追いかける幻想でも見ていたのだろうか。

これはもう、今となっては判らない。

もう一つ判らないが、マルコ神父の消息だ。

生きていたとしても、76歳。爺さんだな。

当時を知っている人は、もうだいぶ年を取っているか、死んでしまっているだろう。

やはり、古いノートを手掛かりにして、考えるのが一番だ。

インタビューを受けたのは、当時すでに退職していた学校の先生。学校による内部調査のことが大まかだが書いてある。

マルコ神父は帰国する日、最後の挨拶をするために、昼に学校に
来た。

帰国する内容が内容なだけに、単純なあいさつ程度だった。

親しい先生方と簡単な別れの挨拶をした後、職員室を後にした。

これ以降、彼の目撃談がない。

マルコ神父は生徒たちにも人気があり、別れを惜しむ生徒も多い。

しかも、白人の男性。

学校の外に出ようとすれば、守衛さんなり、誰かが気づくはずだ。

正門以外を使って出たのだろうか？

入る時に正門から入ってきているので、帰るときに裏門を使うとは考えられない。

第一、昔から警備のため、裏門は閉められており、さすがにそれをわざわざ乗り越えたとは考えづらい。

そう考えると、学校内から出ていないではないか、という考えが出てくる。

ここまで、学校から出ておらず、消息が判らなくなると、マルコ神父は、学校内で自殺したか、殺されたのではないだろうか、という考えに現実味が出てくる。

白人の男性が自殺して、死体がここまで見つからないのはおかしい。

誰かが、隠したと考えるべきだろう。

では、誰が隠したのか？

やはり、学校関係者とみるべきだろう。

自殺の死体を隠すにしろ、殺人を犯すにしろ、人間関係がなければ、そんなことはしない。

では、学校内のどこで死んだのか？

もっとも、放送部の人たちがもっとも怪しんだが、聖堂の天井にある現在開かずの間になっている部屋と同じく聖堂の地下にある納骨堂。

もともとは、どちらも大昔から力ギをなくしたという理由で、開かずの間になっている。

文化財指定になっっているため、無理やり開けるの避けてきたというが、本当のところは判らない。

やっぱり、あそこを調べてみるべきだ。

それにしても、こんな推論が出ると、さすがに公表するのは困難だろうな。

下手に公表すれば、放送部が廃部になるのが目に見えている。

それだけではなく、大学進学も危なくなる。

先輩たちが、調査を止める気持ちも判る。

放課後になるのを待ち、まず、始めに天井にある開かずの間に行ってみた。

木製の扉に、古い大きな南京錠が、かかっている。木製の扉は古く蹴れば壊すのも可能ではないだろうか。

南京錠をよく見ると、錆が削れている。

近頃、誰かが触った後だ。

特に鍵穴の周りの錆が取れている。恐らく誰かが、開けようとしたのだろう。

思い当たるのは、西村京子だ。

予想通り、南京錠はカギがかかっている風になっているだけで、実際の鍵はかかっていない。

再び鍵を閉めるのは、面倒だったのだろう。

鍵を開け中を覗くと．．．蜘蛛の巣だらけの倉庫。

何十年も使われていないせいか、清掃道具は朽ち果て、バケツは錆だらけ。

私たちが、わざわざ別の建物から、清掃道具を持って来ないといけないのは、聖堂に汚いものを置かないためではなく、単に鍵をなくしたから。

時間が経つうちに、本来の理由は忘れられ、別の理由が発明されたのだろう。バカらしい。

地下室の開かずの間は、昔、納骨堂として設計されたものらしい。行ってみると、比較的真新しい南京錠が、しっかりかけられていて、中には入れない。

鍵の穴の周りは、引っ掻き傷があり西村がピッキングを試みたのだろうか。

開けっぱなしになっていないことを考えると、開けられなかったのだろうか。

中で何かを見たのが、以前聖堂から飛び出してきた原因だと思ったのだが……

しょせん、現実はそのままでドラマチックではないということだ。

第6話 島田まな

澤田の友人、島田まなが、体育の授業中突然倒れた。

「大丈夫です」

「駄目だ」と体育教員で島田が所属しているテニス部顧問の柳田みゆき。

「澤田さん。早乙女さん。島田を保健室に連れて行って」
付き添いとして、保健室についていく。

「澤田さん、早乙女さん。もう良いわ。ありがとう」と言って、保険の先生の高橋恵は、私たちを授業に返す。

いや、追い出したということだろうか。

「島田さん。リストバンドを外して」

腕を見るとリストカットの跡。

「何か悩み事でもあるの」

「それが、リストカットをした記憶がないんです。朝起きると手首が切れて血が出ていたり、学校に居る時に突然血が出てきたり。訳が判らないんです」と涙ながらに語る。

「判ったは、そのことは後で、ゆっくりと話しあいましょう。とりあえず、今はベットで休みましょう」

世の中には恍惚感を得るために、リストカットする人もいるが、リストカットは背後に精神病が関係している場合がある。

その場合、本人は何も考えない、感じない状態で切ってしまったていることがある。

そのため、本人が無意識に切ってしまったている可能性や、切ったことを忘れている可能性は十分にある。

そんなときに、下手に相手を非難することは危険だ。

自分は専門医ではないので、治療はできないが、話を聞くぐらいはできる。

それにしても、テニス部で毎日遅くまで練習している、島田さんまで、リストカットをするは意外だった。

いったり、どれだけ広がっているだろうか？

保健室の外で、澤田と早乙女は聞き耳を立てていた。

本来は、このようなことはすべきではないのだが、妙に気になったのだ。

月のもので、貧血になるなら判るが、まさかリストカットとは。

島田はファッションでリストカットをするような人間ではない。

深刻な悩みも思い出せない。

私たちに言えない深刻な悩みがあったのだろうか。

それとも、吸血鬼なのだろうか・・・

昼休み、保健室に、早乙女と共に見舞いに行った。

「澤田も早乙女も、外で聞いてたんでしょ」

「ごめん」

「いいのよ。もう、隠すことじゃないわね」

「私、近頃、毎晩、変な夢を見るの。」

最初はどんな夢がよく判らなかつたけど。近頃は少し覚えているわ。

夜、気が付くと学校の聖堂で開かれている吸血鬼と信者たちの宴に参加しているのよ。

信者たちはたがいに血を吸いあうけど、私は、吸血鬼に捧げられる生贄の1人。

男を知らぬ純白の処女の生き血と肉体こそが、吸血鬼に捧げられ

る最高の供物。

そこで私たちは、手首を切り、吸血鬼たちに血をささげるの。
手首を切っても痛みはなくて、吸血鬼が傷口から血をすすると . . .

気持ち良いのよ。

今まで感じたことがない快樂、恍惚感を感じるの。

そして、夢から覚めると、手首に傷があるの」

島田は、リストバンドを外し、手首の傷を見せた。

「何が恐ろしいって . . . 最初は怖かったけど。近頃は、徐々に楽しみに変わっているのよ。」

早乙女は、以前悪夢を見た時、男の人に助けってもらったって言ったわよね」

「ええ。顔は覚えていないけど、男の人に助けってもらったわ」

「でも、私の夢には、そんな人は出てこないのよ」

島田は自分でリストカットするような人間ではない。

自分は、遊び半分で、ものすごく恐ろしいことに手を出してしまっただけではないだろうか。

私は、どこか他人事に物事を考えていたのではないだろうか。

自分は西村さんのようにはならないと、思っていたのではないだろうか。

今日、島田の告白を聞いて、吸血鬼の脅威が、直ぐ、そこまで来ていたことを知った。

その途端、無性に怖くなった。

図書館で言われた言葉が頭をよぎる。

「警察に話しても無駄。霊能力者に話しても無駄よ。誰も助けはくれないわ」

助けを求めた子は、結局救われなかった。

島田も言っていた。

誰も救いに来ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8812o/>

呪われた学校

2010年11月13日07時52分発行